
Over Sky

桐生

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

O v e r S k y

【Nコード】

N 9 7 7 5 Y

【作者名】

桐生

【あらすじ】

ただ平凡な日々がどれだけ大切なのか、それは失ってから気付くのだろう。

プロローグ1 起床（前書き）

この物語はフィクションであり、
実在の人物及び団体とは一切関係
ありません。

プロローグ1 起床

最近よく同じ夢を見る。

勇者と呼ばれ、仲間と共に世界を救っている夢を。

聖剣を振るい、人を救い、魔物を斬り、魔王を討ち、幸福な未来を掴み取った夢を。

これは夢だ。絶対に夢だ。夢だっていったら夢だ。

というかなんだよこれ、こんな王道ストーリーのRPGなんて今じゃ確実に売れねえだろうが。

最近のRPGはもつとシナリオ凝らないと誰も見てくれねえだろうが。

何だよ聖剣って、確実に銃刀法違反じゃねえか、デザインダサいし。これ聖剣（笑）だろ。

というかなんでこんな夢見てんだ俺。ここ最近ダチと一緒にMMORPGばっかやってたからか。睡眠時間が一日の十二分の一位になるまでやり込んでいるからか。

けど面白えんだよあれ。レベルがないからプレイヤーの腕がモロに出るのが良いんだよね。チートとか汚ねえこと出来ないようになってるのがもうね。

ホントありがとうございます。だからとかいって有料コンテンツとかはしないけど。

「兄さん起きてください」

さて、そろそろ腹の上から感じる重さについて考えるとしようか。およそ50kg程度だと推定。

「失礼ですね兄さん、45kgですよ」

「いや、大差なくね？ あと心を読むな」

「失礼な、乙女の体重は年齢と同様に禁忌ですよ。聞いたからには兄さんには死んでもらいます」

「何で!？」

「社会的に」

「俺に人類の三大タブーの一角を犯せと!？」

「いやです兄さん……『犯す』なんて……優しくしてください」

「しねえよ!？　ってやめろ!　俺の耳元で『欲望に忠実になつたほうがいいですよ』とか囁くんじゃねえ!！」

なんて危険なことを言いやがる。確かに妹は美少女と呼べる部類だが、手を出すほど性欲を持て余した覚えはない。

まだ大人の階段を一段も登っていないが。

ああ、彼女欲し……くはないな、なんか嫌な予感がする。きちんと責任をとれる年齢になったらでいいや。

「……というか何で部屋にいるんだよ、きちんと鍵は閉めたはずなんだが」

「何を言ってるんですか、私の兄さんへの愛憎入り交じったこの気持ちを鍵ごときが遮れるわけないでしょう。破壊しました」

「するな!　って憎!？　憎まれてんの俺!？」

何てこった。知らない内に妹に憎まれていたとは。心当たりが全くないんだが。

「ええ、いつまで経っても兄さんが一線を越えてくれませんので。

可愛さ余って憎さ百倍とはこういった場面で使用するのでしょうか」

「逆怨みも甚だしい!！」

「なら抱いてください」

「却下だ!　というかどいてくれ、起きられん」

「ココがですか？」

「違うわ!!　女の子がそういうことを言っくんじゃありません!！」

ふざけるな。朝から実妹とエロゲ的なシチュエーションなんて御免被る。んなもん二次元のあり得ない妄想だけで十分だ。

「そつですか」

唇を尖らせ、つまらなそうな表情で呟きながら、妹はベッドの上

から降りて俺の部屋の窓辺まで歩きカーテンを開いた。

窓から穏やかな光が射し込み、暗かった部屋を明るく照らす。

妹は若干の愁いを帯びた瞳で朝日を顔に浴びて窓の外を眺めているその横顔を、俺はまじまじと見る。

シャギーを入れ、ベリーショートに整えた清楚な黒髪、憂いを秘めた漆黒色の瞳と、その瞳を際立たせる陶器のように白い肌。

更には均整の取れたプロポーションと、少なくとも外見だけを見るならば、どこかの美術館にでも飾っておきたくなるような美少女。

それが俺の妹、光永 春花だ。

春花はスツと、その細い指で窓に手をかけ鍵を開ける。

そして窓に手を掛け開け放ったその瞬間。

妹が急に身を屈めた。

一瞬、妹の行動に疑問符が浮かぶ。だがそれは一瞬。ほんの一瞬だ。何故ならその直後。

俺の目の前を黒い何かが視認可能速度ギリギリの高速で飛来したからだ。

窓と反対側の壁から激突音というか何かが潰れたような音がしたので俺はそちらに目を向ける。

「……カブトムシ？」

何故かカブトムシが俺の部屋の壁にとまっていた。なんかすげえ堂々としている。存在感がすげえ。カブトムシさんマジばねえっす。

「朝から大したご挨拶ですね、虫女」

「ちっ、当たれよ。っーかビビらねえのかよ。相変わらずつまんねえ奴だな、花女」

そして窓の向こうから声がした。聞こえてきたのは若干幼さが残る少女の声。俺は頭を二、三度掻いた後、妹のいる窓際までパジャマのまま歩いていく。

「……何してんだ秋葉？」

「あ？ いや、あのな、こう、あれだ、ちょうど窓を開けたらその女がいたから、ちよっとな」

「ちょっとでカブトムシが飛来するのか、絶対おかしいだろ」 向かいの家の窓から幼なじみがオレンジ色のパジャマ姿でそこにいた。若干オレンジがかった髪は寝起きらしくボサボサ、眼も寝惚け眼。だがそこに下品な感じがあまりしないのは俺と同じ年だが幾分か幼さの残る端正な顔立ち故か。

「兄さん、支度をしてください。朝食の準備がそろそろ終わる時間です」

「ん？ああ、わかった。んじゃ秋葉、後でな」

いつの間にか俺の背後に移動していた妹から声がかけられたので向かいの秋葉にヒラヒラと手を降る。秋葉はおう、と返事を返し、目を擦りながら振り返って歩いて行った。

何故かさっきまで俺の部屋にいたカブトムシもそれに合わせて秋葉の部屋に飛んでいったのだが。

「……何でカブトムシ？」

俺は先程の光景に頭を捻りながら部屋を後にした。

俺の家はごくごく平凡な二階建ての一軒家。家族も妹が一人に両親と典型的な核家族。

近くにある、偏差値はまあ若干高め？の高校に今年から通っている。

ダチは幼稚園からずっとつるんでるやつとか、小中学校で仲良くなったやつとか、高校で仲良くなったやつとか、結構多めの方。ちなみに秋葉は幼稚園からずっとつるんでるやつの一人。

部活には入ってない。

最近ハマってんのが、どっかの大手のゲームメーカーが今年の元旦に販売したヘッドギアで脳の電気信号だか何だかを読み取ってキヤラが思うままに動くという面白装置を使ったMMORPGだ。

名前を「エヴァ」

どっかの人造人間みてえな名前だが特に関係はない。ダチと一緒にやり込んでる。最近じゃやり込みすぎたせいで大体のトップラン

カーと顔見知りになっている。

かく言う俺もトップランカーの一人なのだが。伊達に昔から体力バカと呼ばれてねえ。これがきっかけて仲良くなったやつもいる。

といつても、それだけじゃ体が鈍るのでリアルでもきちん運動はしている。

親父ともたまに拳で語り合ったりしているが。つか理由の大半が妹の度を越えたブラコンに関してなのは止めてくんねえかな、俺のせいじゃなくね。

そして母さんも親父を見て「かつこいいわあ」なんて言っただけで止めてくれ。その内どっちかが死ぬ気がする。

と、まあこんな感じ。これが俺。今を全力で楽しんでる、

最近見る夢みたいに、ファンタジー要素なんて皆無の、ダチと肩を組んで、バカみたいな会話をして、バカみたいに笑っている、これが俺の日常。

これがホントはどれだけ尊いものだったのか、それを知ったのは少し後のことになる。

プロローグ2 朝の風景は争乱と共に（前書き）

この物語はフィクションであり、実在の人物及び団体とは一切関係ありません。

プロローグ2 朝の風景は争乱と共に

俺と春花の部屋は二階にある。部屋を後にした俺は春花と共に階段を下りていく。

といっても、二人並んで下りれるほど幅が広くはないので俺が先で春花がついてくる。

そして階段を下りるとすぐ玄関があり、向かって左手にリビングの扉がある。

リビングの中からは芳ばしい匂いが立ち込めている。

昨日スーパーから帰ってきて「卵が安かったからいっぱい買ったわあゝ」などと、三十路にも関わらず外見年齢が明らかに高校生相当の不思議生命体である母さんがゆるゝい口調で言っていたのを思い出した。

「朝飯は――」

「白米と鮭の塩焼きと豆腐の味噌汁とお漬け物です、兄さん」

「卵、使わへんのかい」

「夕食に使うそうです」

ちなみに家の家事は食事は母さんと春花が交代でやっている。

母は和食が、春花は洋食が得意だ。

甲乙つけ難いくらいどちらも美味である。

「そうかい……うつす親父、相変わらず極道みたいな顔してんな」

「ああ、おはよう。朝の挨拶も口クに出来んのか愚息」

そっちも大概じゃねえか。

俺はリビングに入り、しかめっ面で新聞を眺めている親父と挨拶を交わした後、親父の向かいの椅子に座る。

テーブルの上にはこんがり焼けている鮭が乗っている横長の平皿四つと湯気が立っている味噌汁が四つ器に入って置いてある。

春花も「おはようございます」と親父と挨拶を交わしキッチンの方へ歩いて行った。

俺の家のリビングはLDK一体型のため、広々としている。

窓から見える俺の家のちよつと広めの庭には親父の趣味の盆栽と春花が育てている普通ならば花屋でしか見ることがないであろう花たちが見える。

「はい、ご飯よ」

「む……」

「うーい」

窓の外をぼーっと眺めていたら、キッチンの方から間延びした母さんの声が聞こえた。

その声を聞き、俺と親父は立ち上がりキッチンの方まで歩いていく。

「ご飯はセルフ式なのが家のルールだ。

「父さん、お飲み物はいかがいたしましょう？」

「麦茶を頼む」

「わかりました」

「俺は「牛乳ですね」心を読むな妹よ」

ホント何なのこの妹。

いつも部屋に隠していたお宝とかパソコンのパスワード全部ばれてんだけど何なのこの妹。サイキッカーか。

「失礼な、兄さんへの愛の賜物です。あと全て口移しですが構いませんね？」

「構うわー！！　ってがあああっ！？　頭を握るんじゃないやねえ親父いいー！！」

春花の発言を聞いた瞬間コンマ数秒で親父が俺の頭を鷲掴みにしながら渾身のアイアンクローを敢行してきた。

この町に居るヤクザからすら恐れられている警察である親父のアイアンクローだ、その気になればヤシの実も砕ける気がしないでもない力を誇っている。たまったもんじゃない。

「やめろー！！　やめてくれ親父ー！！　もう俺のHPは危険域だああー！！」

「父さん、そろそろ危険です」

「む……そうか」

春花の静止の声を聞いて親父は俺へのアイアンクローを取り止めた。

つか何、この露骨な妹贔屓。家庭内暴力で訴えてやろうかコラ。

あ、そういや親父警察だ。ダメじゃん。

母さん頼むから親父を止めてくれよ。何で頼染めてんだよ。「かつこいいわ」じゃねえよ、マジで死人が出るぞ、俺だが。

「頼むから親父の前で冗談はやめてくれ、殺される」

親父が春花から受け取った麦茶とご飯を盛った茶碗をテーブルに持っていったのを見計らい、親父に聞こえないように春花の耳元で声を潜めて言う。

すると春花は首を傾げながら。

「何を言っているのですか兄さん、私の愛は阿修羅すら凌駕する愛ですよ。24時間365日いつでも愛し続けます」

などと『何を当たり前のこといつているんだ』とでも言うような表情で言葉を返してきた。

俺は片手を額に当て、天井を仰ぎ見ながら脳内で思考を巡らせる。はつきり言って春花の俺に対して抱いている感情はおかしい。異常とも言える。俺と春花の誕生日の開きは1年もない。俺が4月。春花がその翌年の3月に生まれた。

それは別にいいだろう。

同じ学年で学校に通うとしても、兄妹としても問題はないはずだが、これは母さんから聞いた話なのだが。

物心つく前から春花は俺から絶対に離れようとしなかったそうだ。俺から少しでも離れるとひたすら泣き続け、何をしても絶対に泣き止まなかったらしい。

それがどれだけ異常か。まだ家族を家族として認識できていないはずの頃からすら、妹は俺から一時も離れようとしなかったそうだ。物心ついた後はさらにエスカレートした。

食事や睡眠、果てはトイレなどにもついて来た。

最近になって少しづつそれを改善させてきたのだが……

「はい、空くんこれ持ってたね」

「……ん？ ああ、了解」

妹のことを考え続けていたら、目の前に横からスツと皿が出された。

威風堂々としている一角獣の絵が描かれている平皿の上には沢庵としば漬けが乗っている。

了承の返答を返してそれを受け取り、空いている手で自身の茶碗を持ってテーブルに持っていく。

俺は机の中央に平皿を置き、自分の席に着く。

後でいいか、考えるのは。

この考えの甘さが数秒後の命取りになるなんて俺は知りもしなかった。

母と春花も席に自身の茶碗をテーブルに置く。

親父の隣が母、俺の隣が春花の席だ。

母さんが自分の席へ座り、

春花が流れるような動きで俺の膝の上に座った。

俺の背中を冷や汗がなぞる。

ピキリ、と音でも鳴りそうな様子で親父の額に青筋が立つ。

「では、いただきます」

「いただきます。ん？ どうしたのあなた？」

「先に食べていてくれ。空、お前は庭に出ろ」そして立ち上がり、クイ、と親父が親指で庭を指差す。

「俺に死ねというのか、親父」

「お前は簡単には死なん」

「ふざけんな。この前どつかの世紀末のやられ役みたいなチンピラを掌底一撃で昏倒させたって聞いたぞ」

「……凶器を持っていたのでな」

「否定してくれよ」

親父が最近人外の道に片足突っ込んできている。

昔は林檎を素手で搾る程度の力しかなかったはずなのに何があったんだ。

だから母さん「かつこいいわ」じゃねえよ。何回言っただよ。

どんだけ親父にベタ惚れなんだよ。

「兄さん、鮭が食べたいです」

「自分で取りなさい。こっちは今、生きるか死ぬかの瀬戸際だ。てかどけや」

「その場合は代償として私のセカンドキスを戴いてもらいます」

「待て親父！！ 落ち着け！！ ん？ セカンドって言ったか今？」

「はい」

「……一応聞いておくがファーストは？」

「それは……」

俺の言葉にはいつめ刹那で返してくる春花が言い淀んだ。俺の膝の上で表情を曇らせ、俯く。

おい、まさか……

「……誰かに襲われたのか？」

「兄さんです」

「待て！！ 落ち着け親父！！ 俺には心当たりが毛程もない！！」

春花は曇らせていた表情を一瞬で変貌させ、日常どりの無表情で爆弾を投下してきた。

親父は閻魔も尻尾巻いて逃げ出すことを予感させるほどの怒気を身体に纏わせ、立ち上がる。

「ふざけんな！！ 濡れ衣だ！！」

「兄さん」

「ん？」

春花が俺の膝の上から身体をスライドさせ隣の自身の椅子に腰を下ろすと同時に、胸元の質量兵器の間から一枚の写真を取り出しテーブルの俺と親父の間に置いた。

いつの間に何かを隠せる領域まで成長したんだこいつの質量兵器は。

「証拠の写真です」

「……何かこの世に言い残すことはあるか？」

「……それでも俺はやってない」

「あらゝアツアツね」

「兄さん、現実を認めてください」

「……認めねえ。こんな現実、俺は絶対に認めねえ」

家族一同が目にした写真には、爆睡中の俺の唇に自身の唇を重ねている妹の姿が写っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9775y/>

Over Sky

2011年12月2日19時46分発行